

Q.海外ではドクイトグモに咬まれて死亡した例がいくつか報告されているとのことなのですが、咬まれたときの死亡率はどのくらいになるのでしょうか。今までに、また最近の1年間でどれくらい報告されているものなのでしょうか

答1 この類の情報は危険をアピールするために誇大な言明がされることが多く、情報の出所を確認することが必要です。信頼すべきデータではドクイトグモ *Loxosceles reclusa* による死亡例はありません。『Toxicology (毒物学)』第7版(2008年, Mc Graw Hill, Medical)の「クモの毒」という節には毒のある種が掲載されていますが、「イトグモ種」も100種以上が記載されているとして総説が記述されていますが、致死性は記録されていません。致死性のあるクモ毒は神経毒ですが、イトグモは組織毒なので傷害が局所に限定されます。ただし、南米のナンベイドクイトグモ *Loxosceles laeta* という種では、Russel 医師が「稀な死亡例」を報告しており、かまれた後で血管内溶血・溶血性貧血・血小板減少・ヘモグロビン尿症・腎疾患と進行したと記述されています(2001年)。また、英国の自然誌博物館学芸員 Hillyard は『クモ・ウォッチング』(平凡社)で、ペルーで尿毒症を発症して死亡した記録は1962-1976年に12人/110例で約10%、合衆国では1896-1968年の72年間に6名/126例(この値は5%)と書いています。来院者の記録なので、咬まれても病院に来ない人もたくさんいますので実際の死亡率はもっと低くなりますが、全身症状つまり重症例があり、稀とはいえ死亡例もあることは事実です。なお日本の屋内にもイトグモが生息していますが、目立たず、性格がおとなしく、ヒトへの毒もありません。

Q.アメリカで実際に噛まれて患部が壊死した女性の写真を見たのですが、とてもひどい状態だったのにもかかわらず、そのとき血清は用いられていないということでした。沖縄ではマムシの血清が常備されているのに、アメリカでは血清は常備されていないのですか？もし広く普及されていないとすれば、その理由は血清が作りにくいものなのでしょうか、もしくは血清を必要としないのでしょうか。

答2 壊死の写真はときどきあります。所蔵している本にも載っています。答3の下記の動画サイトにもありますが、患部だけで全体が撮影されていないのは、たぶん壊死が局所に限定されて小さいためです。血清が作られていないわけではなく、血清を準備するほどには被害が深刻でないためでしょう。そうは言ってもブラジルではナンベイドクイトグモのウサギ抗毒素血清は作られており普通に使われているそうです。ウマ抗血清はウサギにも効果があるとか(2002年)。南米では五種類のイトグモ毒に効く抗毒素も既に開発されているそうです(2005年)。

Q.クモの写真や動画があれば、貸ししていただくことは可能でしょうか。

答3 自分で撮影した写真は残念ながら持っていません。図鑑や写真は本にはいろいろありますが外国の本は著作権がきびしいため、無断借用は不可能だと思います。動画はたくさんありますが、例えば次のところで提供されています。撮影日2008年10月17日の動画はオスの亜成体です。亜成体とは成体脱皮直前の齢(発育段階)です。slk320K という方に写っているのは雌成体です。

<http://www.brownreclusespider.biz/>

クモ毒全般に関する専門的な日本語解説は以下にあります。

<http://homepage3.nifty.com/~hispider/venom/spidervenomjp.htm>

イトグモ刺咬症に関する新しい信頼できる論文で pdf で入手可能なものは下記。(上記答2の参考文献です)

http://urban.cmsdev.ucr.edu/docs/Spiders/%20Loxoscelism_S&V.pdf